

「児童生徒の道徳性の発達を促す指導と評価の在り方について」
～認め、励ます個人内評価を通じて～

坂口幸恵

【要旨】

本研究では、今回の道徳教科化の背景にある「いじめ問題への対応の充実」「発達の段階を踏まえた内容の充実」「問題解決的な学習を取り入れるなどの指導法の充実」を図るために、道徳科の授業における望ましい教材の活用と評価の在り方を研究し、学校教育に役立つ教材開発や指導法の提示、及び評価の在り方について提案する。

まず序論では、眼前の子供たちが、互いを認め合い、尊重し合いながら自己実現を図り、幸福な人生を送れるようにするとともに、互いのつながりを重視しつつよりよい社会を築いていけるようにしたいという筆者の研究への思いを述べた。

児童生徒の道徳性の育成を目標とする「特別の教科 道徳」は、教育の目的である人格の完成を実現するための要の時間である。「特別の教科 道徳」元年に当たり、「道徳科になったことで、教科書をどう受け止め、指導法をどのようにしていけばよいのか」、「他教科と違って評価規準がなく、個人内評価であるために道徳科の評価は難しい」などの現場の教師の切実な声に応えたいと考える。では、「特別の教科 道徳」における「児童生徒の道徳性の発達を促す指導と評価」とはどのようなものか。次代を担う子供たちが豊かな人間関係を築いていけるように、学校教育において人との関わりの大切さ、友人という存在の大きさを実感させるような指導が必要だと感じる。特に、道徳科においては、「相互依存のネットワーク」という広い視野に立ち、学習指導要領における内容項目をまとめた4つの視点「自分自身に関すること」「人との関わりに関すること」「集団や社会との関わりに関すること」「生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること」を通して、豊かな温かい人間関係を育むことが肝要だと考える。

一方、児童生徒の学校生活における意識はどうであるか。東京都では10年前から、いじめにかかわる調査を全校で毎学期実施し、一人一人の児童生徒の記述全てに校長が個別の面接調査をしている。児童生徒にとって最も大きな問題は学級の中での友人関係であり、ささいな行き違いから大きな確執に発展する事例も少なくないと受け止めている。しかし、国が調査する意識調査からは児童生徒の友人関係の深刻さは浮き彫りになってはいない。そうした乖離性はどこにあるのか。児童生徒の意識調査や面接を通して個別に把握する必要がある。道徳の教科化を契機に、真に子供たちの道徳性を育成すべく先行研究を検討するとともに、児童生徒の道徳性の発達を促す指導と評価の在り方について研究する必要性を明らかにした。

第1章では、序論を踏まえ、「道徳の時間」時代の道徳教育とその問題点を明らかに

修士論文要旨

し、教科としての道徳の導入にあたって改善すべき点を提案し、本研究の関心である「児童生徒の道徳性の発達を促す指導と評価の在り方」について研究を進めるという方向性を示した。眼前の子供たちを豊かな人間関係を築いていく大人へと育てていくために、学校教育において人との関わりの大切さ、友人という存在の大きさを実感させるような指導が必要だと感じる。特に、道徳科においては、「自分自身に関すること」「人との関わりに関すること」「集団や社会との関わりに関すること」「生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること」を通して、豊かな温かい人間関係を育むことが肝要だと考える。これは、本研究が基盤とする岩佐信道の「相互依存のネットワーク」という広い視野に立った道徳教育の考え方に結び付くものである。

内閣府等の調査結果を受け、本研究を進めるに際しては、道徳科の授業における評価を児童の道徳的諸価値の理解を基に、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方について深く考えさせていくのに有効な方法を探っていくこととした。本研究では「友情」を切り口に、「人との関わりに関すること」の視点全体を視野に置いた広がりのある授業実践を通して、道徳科の指導と評価の一体化を図った指導法及び児童生徒の発達段階に応じた評価法を実践的に追及することとした。

第2章では、「道徳の時間」時代の道徳教育を中心に歴代の学習指導要領及び研究者の見解・提言から示唆を受け、「特別の教科 道徳」時代にふさわしい指導と評価の在り方について考えた。先行研究を踏まえ、研究仮説を次のように設定した。

大仮説：広い視野から道徳的価値を捉えた道徳授業を進めていけば、児童生徒の道徳性の発達を促すことができるであろう。

小仮説1：児童生徒の道徳性を内容項目の視点ごとのくくりで捉えれば、道徳的価値の理解が深まるであろう。

小仮説2：パフォーマンス課題でルーブリックを設定した学習をすれば、多面的・多角的に考えるであろう。

小仮説3：振り返りシートで自己評価すれば、自己の生き方と関わらせて考えるであろう。

道徳科における指導法については、これまでの「正直」や「思いやり」等、一つの内容項目に特化した指導から、「自分自身に関すること」「人との関わりに関すること」「集団や社会との関わりに関すること」「生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること」という視点ごとの大きくくりのまとまりによる指導へと転換することが必要だと考える。その理由は、児童生徒を取り巻く環境は様々な道徳的価値が混在しており、日々の生活で迷いながらも自己決定しているからである。また、「主人公はどんな気持ちでこのような行動をしたと思うか」等の教材中の登場人物の心情の読み取り中心の指導から、道徳的な問題について学習者である児童生徒一人一人が我がこととして自我関与する学習活動へと転換していくことが必要である。その理由は、教材中の主人公の気持ちを考

修士論文要旨

えるだけではどこか他人事になってしまい、自分事として捉える力が不足してしまうからである。道徳科の学習は、岩佐信道の人間の生き方を自然や地球全体をも含むすべての存在との関わりで捉える立場としての「相互依存のネットワーク」の考えを基盤にすべきである。また、道徳問題とは、自分と相手と第三者との間で生じるものであり、この三方をどのようにとらえ、どのように折り合いをつけるかという問題である。そして道徳性の発達とは、この三方の立場をいかに考慮し、尊重するかということである。そこで本研究においては、中心となる内容項目を「友情」に設定しつつも「人との関わりに関すること」の視点全体を視野に入れた指導をすることとした。また、その指導法にふさわしい教材開発をし、教材中の道徳的課題を捉えて「本当の友達になるためにはどうしたらよかったのか」と問題提起するパフォーマンス課題を設定し、数人がそれぞれの登場人物の立場になって考える役割演技を通して自我関与させる学習指導を提案する。この発問は、行安茂の「道徳的価値を一つ一つ理解したからと言って、全体としての人間は見えてこない」としてフレンケルの10段階の問い方を提唱していることに着想した。

一方、道徳科における評価法としては、パフォーマンス課題に取り組む際に、あらかじめ評価の観点を設定し、その観点の尺度を示す評価指標であるルーブリックを取り入れ、評価規準を設定して学習活動に取り組ませることとした。この評価法は、富岡栄の考え方を基本に、押谷由夫の子供たち自身の自己評価力を高めることの大切さ、上蘭恒太郎の自己肯定感から着想を得て、児童生徒の自己肯定感に着目した研究を進めることとした。また、関根明伸が学習指導要領における評価の問題点を指摘し、道徳科においてエバリュエーション評価するための測定資料としてアセスメントの実施を提唱していることに注目し、本研究ではルーブリックを測定資料に生かしていくこととした。学習指導要領では「特別の教科 道徳」の評価は、「認め、励ます個人内評価」とし、数値による評価はしないとされている。しかし、本来「評価」とは指導の効果を確かめて、その改善を図るために必要であり、そのために客観性を持った測定資料が必要であると考える。なぜなら「評価」は教科の目標実現状況を確認(測定)し、それに基づいて、その間の教育が目標実現のために機能していたかどうかを点検する活動であるからである。学校教育全体を通じて行う道徳教育はもちろん「特別の教科 道徳」においても、教育目標から見た「道徳性」としての内面的資質の到達度合いを測定し、教育目標の実現状況を点検し、改善していくことが求められると考える。そこで、本研究においては学習活動の中心発問に教師が意図的に設定した道徳的価値に関わる問題提起としてパフォーマンス課題を設定することとした。その際に、課題に取り組む評価規準としてルーブリックを作成する。ルーブリック作成に関しては、評価者である教師が作成することはもちろん、学習の主体である児童生徒自身にルーブリックを作成させ、自己評価に生かすことを試みた。児童生徒によりよい人間関係を意識化させ、互いに認め合い、友情を育むよう児童生徒の自己肯定感に着目しながら自己評価力を高めていく学習展開

修士論文要旨

とした。さらに、終末段階では「授業の内容を理解できたか」「授業に積極的に参加したか」「学んだことを積極的に生活に取り入れてみようと思うか」等を振り返りシートによって自己評価させた。特に、「自己の生活に生かしていこうと思うか」に着目し、児童生徒が自分の行動や考え方を客観的に認識するメタ認知を高めていくこととした。

第3章では、まず「友情」を切り口に授業検証を実施するにあたって、「友情」資料・教材について時系列に一覧にまとめ、その内容と傾向を分析した。そして、本研究が基盤に据える広い視野からの道德教育「相互依存のネットワーク」という視点で考えると教科書教材だけでは不十分であると分析し、優れた絵本を教材化することにした。一つは、絵本『風切る翼』（木村祐一著）である。主人公クルルが、体の弱いカララにえさを与えていた時に、仲間のツルがキツネに襲われ、命が失われた原因をクルルの行動のせいにされてしまうという内容で、いじめの問題とも絡めながら、「友情」を「生命尊重」や「公平公正」と関連させて捉えることができる。クルル・カララ・仲間のツルそれぞれの立場になって考えさせることは三方よしの考え方に通じている。もう一つは、『からすたろう』（八島太郎著）である。主人公の男の子はちびと呼ばれ、友達もいずに、いつも一人だった。ちびは何でもよく観察していた。六年になって磯部先生が担任になった時、先生の勧めで学芸会でカラスの鳴きまねをしたことがちびの転機となった。悲しい時うれしい時それぞれにカラスの鳴き声を変えるちびの表現力に、クラスみんなは驚き、これまでの自分たちの行動を反省したのだった。いじめの問題を我がこととして受け止めさせ、友情について多面的・多角的に考えさせることができ、広い視野から道德的価値について話し合わせ、考えさせることとした。

開発した教材を基に、平成30年度の5年生を対象に東京都江戸川区のS小学校で実際に実験群としての第一次授業検証を行い、授業前後のアンケートや抽出児童への面接調査を行った。この実験群と並行して、教材「風切る翼」を活用して、区内小学校3校（4・5・6年生）と中学校2校（2年生）を対象に統制群としての授業実践を行った。教材中の登場人物の心情に寄り添った指導をした統制群では、児童生徒の教材に対する興味・関心は高かったものの、いじめの状況の中では自分がターゲットにならないようにするのは仕方がないと思う発言や記述が多く、どうすればみんなが仲よくできるかを主体的に考えるまでに至らなかった。また、ルーブリックを作成しなかった統制群での評価は、児童生徒の道德授業での発言や記述を基に行ったが、一人一人を認め、励ます個人内評価をするには不十分であった。実験群と統制群との比較を通して、パフォーマンス課題を設定し、自我関与させながら課題解決していく道德授業を行うことが効果的であることが明らかになった。また評価についても、実験群の児童が作成したルーブリックを生かして役割演技をすることが、児童によるルーブリックを作成しなかった統制群よりも効果的であることが分かった。さらに「授業における積極性」や「内容理解」を自己評価させ、「自分の生活に生かそうとする意欲」を問う「振り返りシート」を毎

修士論文要旨

時間実施したことは、児童のメタ認知を高めるのに効果的であると分析する。

第4章では、第3章の結果を踏まえて多時間扱いの道徳授業の指導法の効果やルーブリック評価の効果を検証すべく、第二次授業検証として、令和元年度に東京都江戸川区のS小学校5年生を対象に実験群とし、2時間扱いで2つのパフォーマンス課題に取り組ませた。パフォーマンス課題1は、第一次授業検証と同じものである。パフォーマンス課題2は、教材に存在しない人物を登場させて自我関与させたり、教材中のキーマンを差し引いて自我関与させたりすることで、児童が自分の問題として捉え、関わりながら考えることができたことと分析する。授業前後のアンケートや抽出児童への面接調査からも実証された。さらに自作教材「心のつながり」を活用し、身近な道徳的課題について話し合わせ、考える学習を展開した。

この実験群と並行して、教材「からすたろう」を活用して、区内小学校2校(6年生)と中学校2校(2年生)を統制群としてパフォーマンス課題1について話し合わせる授業実践を行った。なお、この統制群ではルーブリックは作成しなかった。

研究の結果、多時間扱いでパフォーマンス課題2つを設定し、児童が作成したルーブリックを活用した実験群では、児童は「自分にとっての友情」と「相手にとっての友情」、さらには「学級全体での友人関係の在り方」について考えるようになり、パフォーマンス課題1つだけでルーブリックを活用しなかった統制群よりも児童一人一人の考え方が多面的・多角的になったと分析する。また、実験群の振り返りシートでは「自分よよい友人は、相手にとって自分もよい友人であるべきだと思う」や「自分の友人関係をよくするためには、クラス全体の友人関係もよくないとだめだと感じた」など、一人一人の児童が「三方よし」の考え方に基づいて自己の生き方と関わらせていこうとする意欲が感じられた。ここから多時間扱いでの道徳授業で2段階のパフォーマンス課題を設定した実験群での指導法が効果的であることや、児童が作成した学習活動面と道徳的価値側面とのルーブリックが自己評価を高めるのに効果的であることが明らかになった。

なお、本研究では自己肯定感の高い児童と自己肯定感の低い児童を抽出し、各児童の発言・記述を基に授業後の面接調査などを通して個別の見取りを中心に研究を進めてきた。その結果、自己肯定感の高い児童はその受け止め方が積極的で、その効果が顕著であったが、この指導法そのものは、自己肯定感の低い児童についても必要なものであったと考える。研究の切り口の1つとして自己肯定感に着目して授業の効果を検証することは効果があったと分析する。

第5章では、研究全体のまとめとして、6つの成果を提示することができた。

- ア 多様な価値が混在する教材を活用して自我関与する道徳授業が児童生徒の道徳性を育むことが明らかになった。 【小仮説(1)の検証】
- イ パフォーマンス課題を設定し、役割演技で自我関与して解決させる学習活動が、児

修士論文要旨

児童生の多面的・多角的な考えを育むことが明らかになった。

【小仮説（2）の検証】

ウ 授業を通して、人との関わりを大切にする「友情」へと児童の意識が変容した。

【小仮説（3）の検証】

エ パフォーマンス課題でルーブリックを作成して自己評価することが、児童生徒のメタ認知を高めることが明らかになった。

【小仮説（2）の検証】

オ 多時間扱いの道徳授業で道徳的価値の重点化を図ることが、児童生徒の道徳性を高めることが明らかになった。

【小仮説（1）の検証】

カ 校内で共通理解を図り、道徳科の「認め、励ます個人内評価」の文例を共有活用することが効果的である。

この6つの成果全体が大仮説の検証に結び付くと考える。

今後の課題としては、2つのことについて言及した。

ア 本研究は内容項目「友情」を切り口に進めてきたが、他の内容項目でも本研究での指導法と評価法の効果があるのかを検証するまでには至らなかった。今後は、本研究の成果がどの内容項目についても一定程度の普遍性があるのかを研究していく。

イ 本研究は江戸川区内の小中学校103校の協力の上に進めることができたが、研究途上においては十分な恩返しができていない。今後は、本研究の成果を小中学校現場に還元していく活動を推進する。

結論では本論文を総括し、明らかになった点と今後の展望について述べた。

ア 今後も広い視野に立った道徳教育を推進するために、教材選定を大切にする。採択した教科書以外の教材を活用する際には、文部科学省教材など原典に当たり、児童生徒の実態に応じて変更する。

イ 指導法の工夫として多時間扱いの授業の効果を考え、重点項目を3時間扱いにするなど、綿密で弾力的な年間指導計画を作成する。

ウ パフォーマンス課題に取り組む際のルーブリックとして、すべての内容項目について教師の評価基準を学習活動面と価値理解の側面との両面から設定し、児童生徒が作成するルーブリックも活用する。その際、児童の発達段階を考慮し、小学校低学年・中学年の児童については学習活動面のみのルーブリック作成とすることとした。

エ 児童の自己肯定感に着目し、抽出児童に丁寧な面接調査を重ねて研究したが、この取り組みを現場で効率的に生かすための方法を検討する。

本研究を通して明らかになったことを現場の教師に広く活用してもらえるよう浸透させ、児童生徒の道徳性を高める指導方法や評価方法についてさらに研究を深めていく。

参考文献

- ・ローレンス・コールバーグ著 岩佐信道 訳『道徳性の発達と道徳教育 コールバーグ理論の展開と実践』（麗澤大学出版会、1987年）
- ・岩佐信道「道徳性発達論と道徳の授業の展開」（日本道徳教育学会編『道徳教育入門——その授業を中心として』第2部 第3章、2008年）
- ・岩佐信道「リアル・ディレンマへの対応の分析に関する一考察～「三方よし」の道徳性発達論の試み～」(『日本道徳教育学会 論文集』2008年)
- ・岩佐信道『「三方よし」と「相互依存のネットワーク」——道徳性発達研究の新しい展開のために——』（日本道徳教育学会誌『道徳と教育』第336号、2018年）
- ・行安茂「デューイと道徳教育——アクティブ・ラーニングの可能性と課題——」（『日本デューイ学会紀要』第58号、2017年10月）
- ・押谷由夫『アクティブ・ラーニングを位置づけた小学校 特別の教科 道徳の授業プラン』（明治図書、2017年）
- ・田沼茂紀『指導と評価の一体化を実現する道徳科カリキュラム・マネジメント』（学事出版、2017年）
- ・富岡栄「道徳の時間の評価に関する実践的研究～教科化に向けての取り組み～」(『日本道徳教育学会』実践研究論文、2015年)
- ・関根明伸「道徳性の発達について」（『日本道徳教育学会』第94回大会発表要旨集、2019年）
- ・自尊感情測定尺度（東京都版）「自己評価シート」（東京都教職員研修センター紀要 第11号 2011年）
- ・文部省「小学校 道徳の評価(特に学級における友人関係の指導と関連して)」（文部省、1961年）
- ・木村祐一『風切る翼』（講談社、2002年）
- ・やしまたろう『からすたろう』（偕成社、1979年）